



## 頭を渡す

著者	黒田 一充
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	68
ページ	6-9
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023855">http://hdl.handle.net/10112/00023855</a>

# 頭を渡す

黒田 一 充

各地の神社には、常住の神職がいないため、他社の神職に兼任してもらって神事をするところが多い。そのようなところでは、神社の管理だけではなく、場合によっては祭りも氏子だけで行っている。氏子総代が祭りの準備をするところもあるが、一般的には氏子の男性の中から毎年交代で当番を決めている。この当番を、頭屋あるいは頭人とよび、当屋や禱人などの漢字をあてるところもある。

頭屋は家順が決まっていたり、抽籤で決めたりするが、嫁を迎えた際や長男が生まれた際など、地区で定められた条件の人に廻る場合もある。頭屋になると、神事やその後の宴会を主催し、祭りの参加者に振る舞いをするため、多額の出費がともなう。負担を均等化するために、氏子の家数が多い地区は一生に一度ということになっており、出費を軽減するために地区の集会所を使うようになったところも多い。

香川県善通寺市・木熊野神社の秋祭りの頭屋（統本）宅では、祭りの前に門口で御神舎とよぶ小祠を建てて神霊を迎え、御由留輪とよばれる小桶2個に、神社の前で汲んだ湧き水と、そこで洗った白米を入れて納める。宵宮には神輿が運ばれて、氏子地区の子ども獅子舞が奉納されるが、祭りにあわせて住居を建てなおすこともある（写真1）。祭りの当日は、ここから神輿が出発し、御由留輪を運ぶ頭屋の一行とは別

の道を通って、旅所の薬師堂へ向かう。頭屋宅に仮設の小祠を建てるところはあるが、神輿も頭屋宅から出発するのはきわめて珍しい。

頭屋が交代する際には儀礼があり、頭渡しとよぶところが多い。時期としては、年末や3月の年度末のところもあるが、多くはその神社で一番大きな祭りの際に行われる。頭渡しは関係者だけが集まって、その年と翌年の頭屋が盃を交わし、文書や道具類を引継ぐ。中には、氏子たちが見守る公開の場所で行うところもある。

香川県三豊市豊中町の熊岡八幡神社は、小高い山の上であり、秋祭りには麓の宮池の畔にある旅所へ神輿が運ばれる。頭屋（頭元）は21地区が交代してつとめ、御供の準備や直会の世話をする。拝殿での神事の後に直会があり、その間に神輿へ獅子舞が奉納されて渡御に出発する。旅所への途中、石段下の神事場に神輿が一旦安置される。神事後、氏子地区の代表たちは神輿の前にコの字に並んで座り、神酒と小餅を入れた吸物膳が廻される。それが終わると宮司が中央に出て正面を向いて座り、その前で頭元と翌年の頭元を出す地区の代表が向かい合い、祭りの準備品などを記した書類を納めた黒漆塗の箱を手渡す引継ぎの儀礼がある（写真2）。

この神社では、頭元とは別に祭りで重要な役割をつとめる子どもが出る。オカヤモチ（一つ物）とよばれる生まれたばかりの赤ん坊で、母



写真1 木熊野神社・頭屋宅の御神舎と神輿 (2013年)



写真2 熊岡八幡神社の頭渡し (2013年)



写真3 熊岡八幡神社のオカヤモチ (2013年)

親が抱き、父親は茅（ススキの穂）を持って行列に参加する（写真3）。土踏まずということで神聖視されており、神事場ではこの茅を神輿の前に立て掛ける。茅は笠岡地区の聖地から刈って来るが、笠岡は頭元を出す地区には含まれない。オカヤモチは地区内の決まった5軒の家から出されたが、少子化のため氏子地区で生まれた子どもの中から選ぶようになっている。

頭屋も祭りの準備だけではなく、氏神への奉仕のために精進潔斎をするところがある。三重県熊野市二木島町の室古神社と甫母町の阿古師神社は、二木島浦の入り江の南北にあり、祭りは両社を船で廻る。もとは旧5月と旧11月だったが、1972年から11月3日だけになっている。両社の氏子からひとりずつ選ばれる頭屋（禰屋）は、ショウドともよばれ、12月1日の注連付祭で交代する。その際、海で禊ぎをして神職から数珠とよぶ首飾りを掛けてもらう。柳の枝108個を紐に通したもので、前任者から引継がれる。

翌年秋の土用の中日にはもうひとつ新しい数珠を作り、10月1日の注連掛けの日にあらかじめ神職に掛けなおしてもらう。この日から毎朝



写真4 二木島祭のショウド（右から2人目）とガズ（4人目）（1984年）



写真5 神内神社の弓神事（1987年）

夕の海で禊ぎをし、祭り当日まで髪や髭に刃物を当ててはならないなど、厳しい精進潔斎に入る。

祭りは両社の境内で儀礼があるが、その際、烏帽子に直垂姿のショウドとともに、嫁入り衣装を着たガズが座る。ショウドの娘か親類の女兒がつとめるが、もとは、ショウドの妻の役だったと伝えられる（写真4）<sup>註1</sup>。

三重県紀宝町神内の神内神社では、1月2日に弓神事が行われ、神社の田で4人の頭衆が鬼の字を書いた的に矢を射る。この烏帽子姿の頭衆も、首に竹の管の数珠を掛けている（写真5）。弓神事後、神社の御神体である岩窟の前で、頭渡しが行われる。その年の頭衆と翌年の頭衆が向かい合って互いの額をくっつけ、翌年の頭衆の首へ数珠を掛ける（写真6）。ここでは、頭衆の印である数珠を直接引継いでいる。

この儀礼の場は男性だけだが、例外として頭衆の家の女兒がふたり、御供持ちという役で参加している。本来は、もっと年長の女性であった可能性が高い。

よく似た儀礼を記した祭りの報



写真6 神内神社の頭渡し（1987年）

告がある。和歌山県北山村と三重県熊野市紀和町の県境は北山川が流れ、奥瀬おくせとよばれる溪谷になっている。現在は県境だが、もとは新宮の管轄下であったため、川沿いの集落の祭りは同じ形態をしていた。北山村小松と対岸にあった旧紀和町和田（廃村）で、昭和30年代に行われていた祭りの様子を、鳥越憲三郎が報告している<sup>[註2]</sup>。

ここでは、7、8歳の小学生がショウドに選ばれ、その姉妹がガズとなった。ショウドになると、他家の料理を食べることができない、頭頂の髪の毛を元結で括るなどのしきたりがあった。

祭りの当日は、行列が神社へ向かった。ショウドと翌年のショウド（ミョウド）は、烏帽子姿で小刀を差し、行列先頭のガズは、首に竹の管を通した数珠を掛けて笠をかぶった。

神事後は頭屋宅へ戻り、当渡しが行われた。ショウドは数珠を烏帽子に掛けて上座に座り、川で禊ぎをして来たミョウドは、向き合って下座に座る。盃事後、ふたりの烏帽子に数珠を掛け、両手をついて額と額を突き合わせると、ショウドが「渡します」と言って数珠をミョウドの首に掛ける。これに対して、「受けました」とミョウドが答えて当渡しが終わる。神内神社と同じ儀礼が、行われていたのである。

ここでも、当渡しの印が数珠になっていた。この数珠はガズが首に掛けていたものであることから、本来はガズが祭祀の中心で、男子の祭祀に先行して、女子が祭祀権を掌握していた証拠だと、鳥越は指摘している。

奈良県天理市・大和神社の祭りには、9つの地区で頭屋が選ばれ、4月1日午後の神輿渡御に参加する。多くの地区での頭屋の申し送りは



写真7 天理市成願寺町の頭屋の申し送り（2008年）

祭りの後に行うが、成願寺町だけは神輿の渡御に先立って行われる。

頭屋宅の座敷では、仲人として氏子の最長老の男性が座り、その右隣に申し受け人として翌年の頭屋の男性が座る。左隣の申し送り人は今年の頭屋ではなく、晴着に赤い袴をした頭屋の妻が座る。三人の前には、酒盃やすめるめ・昆布・梅干しを載せた平膳を置く。その場の最年少者が給仕人となり、神酒を注いで頭屋の妻・翌年の頭屋・仲人の順に盃を交わす。最後に仲人が「無事引継がれました」と挨拶をし、平膳の品を分けて儀礼は終わる（写真7）。この間、今年の頭屋は隣の部屋から眺めるだけであり、頭屋の妻も午後の渡御行列には参加しない。

この事例の原形と思われる儀礼のことを、兵庫県西脇市黒田庄町門柳もんりゅうの住吉神社の秋祭りで聞いたことがある。神社での神事と直会が終わると一同は次の当人宅へ行き、御当渡しの盃事をする。現在は男性だけだが、以前はアイトウ（今年の当人）、ホントウ（翌年の当人）とも夫婦で出席し、アイトウの妻とホントウ、ホントウの妻とアイトウが向かい合って座り、盃を交わした。この儀礼は「嫁さんのかえっこ」ともよばれ、戦後しばらくまで行われていたという。これらの儀礼からは、男性祭祀の前に女性祭祀があったと単純には言い切れない。

年頭の弓神事を、関東地方ではオビシャとよぶところが多く、とくに千葉県は盛んである。八千代市八千代台西はかつて高津新田とよばれた地区で、2月11日に行われる諏訪神社の弓神事は、カラスの絵を描いた的を射ることからカラスピシャともいわれる。

社前での神事後、境内で参列者が順に矢を



写真8 高津新田のオトウワシ（2013年）



写真9 高津新田のハッセ (2013年)

射る。最後にカラスの目に矢を突き刺し、農作物を荒らす害鳥を退治して豊作を祈る。これが終わると男性たちは集会所へ移動して、オトウワタシをする。地区には愛宕神社もあり、もとは別々の日だったが、現在は共同で行う。

まず、諏訪神社のオトウワタシがある。縦半分にした大根を用意し、今年の当番ふたりと翌年の当番ふたりが向き合って座る。最初に今年の当番が神酒を飲むと、翌年の当番が両手に大根を持ち、平らな面に塩を付けて相手の両耳の上あたりに擦りつける。次は反対に、翌年の当番が神酒を飲むと、今年の当番がその頭に大根で塩を擦りつける(写真8)。ふたりの当番で主となる人をカシラとよぶが、続いて今年のカシラが、翌年のカシラの襟首から背中へ御神体を差し入れて、オトウワタシは終わる。御神体は、翌年のカラスビシャで準備する品物やその次の当番の氏名が記された書類で、カシラの家の神棚で1年間大切にまつられる。塩を擦りつけるのは、禊ぎと同じように清めの意味があると思われる。この後、愛宕神社の当番のオトウワタシになるが、儀礼は同じであり、それが終わると一同で食事をする。

引継ぎをしても当番の仕事は終わりではなく、午後に氏子の女性たちが集まるハッセがある。お菓子や甘酒などは当番夫婦が用意し、夫が女性たちに酒を注いで廻る(写真9)。会の終わりにハッセとよぶ歌を唱うことから、この集まりの名称にもなっているが、祭りが男性たちだけのものではなく、女性たちも参加していることがよくわかる。

同じような事例は、各地のオビシャでもみられる。館山市茂名・十二所神社の祭りでは、現



写真10 十二所神社の里芋祭 (2012年)

在弓神事はなくなり、器に山積みした里芋を神前に供える(写真10)。里芋は、地区の全戸が2軒ひと組で組織された積み番仲間が栽培し、当番の家に持ち寄って器に積む。神饌の準備や里芋の運搬、神事と直会、その後の当渡しも男性だけが参加する。

翌日午前中の片付けを終えると、午後は当番の家で「女たちのお籠もり」とよばれる集まりがあり、地区のほとんどの主婦が参加する。非公開だが、煮メや<sup>にしめ</sup>なます、赤飯などの食事が出され、そのうち歌や踊りが披露されて賑やかに過ごすという。

祭りの儀礼に女性たちは参加しないが、里芋を育てるのも各家の妻たちの協力がなければむずかしい。この集まりは、祭りの裏方を支えてきた女性たちを慰労する場である。祭りの儀礼の場には男性たちだけしかいなくても、女性たちも一緒に参加しているということ、これらの事例は伝えている。

頭屋というのは当番の家の夫だけを指しているところが多いが、夫が頭屋をつとめるとはいつても、妻の協力がなければ1年間の役目をおえることはできない。頭屋を受けるということは、妻や子どもたちも含めて家族で当番を引き受けているのである。

註1 二木島祭は、2010年を最後に休止している。

註2 鳥越憲三郎「熊野北山峡の神祭」(豊中市立民俗館『民俗』1-5、1957年。日本民家集落博物館『民俗[復刻版]』上巻に収録、2006年)。